

保護者の皆様

## 平成28年度「全国学力・学習状況調査」の結果について

千早赤阪村立千早小吹台小学校  
校長 當麻裕彦

今年の4月19日に実施しました標記の調査(6年生対象)の結果から見てきた本校6年生の実態及び課題と今後の改善点について、学校として行った分析と考察をお知らせします。

---

### 国語科の調査より

---

#### ◆A 調査(主として知識)について

平均正答率は全国平均を少し下回っています(全15設問中、上回っていたのは4問でした)。

領域別の集計結果について見ると、「話すこと・聞くこと」と「読むこと」は、おおむね全国平均前後の正答率でしたが、「書くこと」「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項(いわゆる「言語事項」)」は全国平均を下回っています。一方、比較的正答率が高かったのは、漢字の読み書きと書写に関する問題で、書写の内容は、毛筆の文字の大きさや配列のポイントを、用紙全体との関係に注意して正しく判断できているかどうかというものでした。

以下、正答率が全国平均と比べて低かった設問を取り上げ、考察を添えて参ります。

もっとも課題が顕著に表れていたのは、「言語事項」の「ローマ字」に関する、「りんご」「あさって」をローマ字で書く問題と、「hyaku」(百)を読む問題でした。ローマ字に関する3問は、全国的にも、他の問題と比べて格段に正答率は低い結果でしたが、本校はそれらをさらに大幅に下回っていました。「hyaku」(百)を読む問題については、無解答率の高さも顕著でした。

国語科でローマ字を学習する時間は限られておりますが、それは本校に限ったことではありません。定着を図るためには継続した取組みを行ったり、コンピュータでのキーボード入力など、活用を確保したりする工夫が必要です。昨年度末、本校では、授業でのICT活用について、タブレット端末はよく授業で使うようになった反面、コンピュータ室の利用が少ないという反省が上がりました。それを受けて今年度初めに、「情報教育の各学年での到達目標」を設定しました。コンピュータの使用スキル、情報モラルの内容も入れ、3年生からのローマ字入力の活動も含んだもので、これをもとに指導に取り組んでおります。また、外国語活動については、本村は村立幼稚園も含め小学校1年から中学校まで、先進的な学習を積み重ねてきております。小学校英語は、「話す・聞く」のコミュニケーション活動が基本で、現在文字指導はほとんど入れておりません。今後5・6年が教科化となることを見据え、読み・書きの活動の導入を検討しております。英語とローマ字は若干異なりますが、アルファベットに親しむ機会が増える方向になります。それらの取り組みとローマ字の反復とを組み合わせて改善を図る考えです。

また、「書くこと」の中で、「掲示物の下書き原稿を見て、改善すべき助言を選択肢から選ぶ問題」、「パンフレットを作るためのメモづくりで、取材メモを追加した理由を考える問題」も、全国平均との開きが大きかった問題です。「書いたものの表現の仕方に着目して助言すること」、「全体を見通して事柄を整理すること」を実際の授業の中で、もっと体験的に行う必要があると考えます。

## ◆B 調査(活用力)について

平均正答率は、全国の平均正答率を少し下回っています。設問別では、全10問のうち、ほぼ全国平均通り、もしくは上回ったのも3問ありましたが、正答率が顕著に低く、活用力について特に課題を感じた1問がありました。その内容や考察は、次の通りです。

学級で「早ね早起き朝ご飯」運動に取り組んだ成果を、アンケート結果が分かる帯グラフと集計結果表を加えてまとめた報告文の一部を読んで、解答する問題です。1問目の、「次の日に学校がある日に、夜10時を過ぎても起きている人の割合」が、5月時調査に比べて、取り組み後の11月時調査でどう変わったか、帯グラフを比較して選択肢から正しい考察を選ぶ問題は、ほぼ全国平均並の正答率でした。しかし、「次に学校がない日は、学校がある日に比べて、ねる時こくが二時間以上おそくなる人のわり合が減っていない」という課題に気づき、解答欄にある書き出しの言葉に続けて、40字以上、60字以内にまとめる問題が、非常に正答率の低い結果となっていました。この問題は、報告文に添えられた資料の帯グラフで、「よくある」「ときどきある」の合計を、5月時調査と11月時調査とを比べる視点が必要です。資料のどこを使って考えるのか、何と何を関係付けながら考察するのか、また適切な言葉で解答するためにどの条件に留意するのかが分からないと正答にはなりません。社会科や理科等でも、資料活用の効果的指導を意識して参ります。

この問題で扱われていた課題について、次の問いでは、「解決方法」を書くよう指示されていましたが、この正答率は、全国平均に近い結果でした。同じく一定の文字数で書く問題でしたが、もう一つの解決方法が報告文に載っていて、それが参考になること、また、問題に、『テレビやゲーム』、『メールなど』の両方の言葉を使って書くこと」という条件があることから、答えるべきことが絞りやすかったのではないかと推測しています。

分かる授業にするために、細やかな配慮や混乱を避ける情報提示を、教師は心がける必要がありますが、自力学習の部分も大切に、まずは自分の力で課題解決の糸口、突破口を探す過程を効果的に取り入れる必要があると感じております。

---

## 算数科の調査より

---

### ◆A 調査(主として知識)について

平均正答率は、全国平均をわずかに下回っています(全16設問中、8問は上回っていました)。全国平均よりも大きく正答率が低かった問題は3問で、次のようなものでした。

- ・  $2.1 \div 0.7$  というわり算で、それぞれの数に10をかけて、 $21 \div 7$ としても、答えは同じ「3」であると答えるべき問題で、 $2.1 \div 0.7 = 0.3$ と誤答したケースが多くありました。
- ・  $8\text{m}^2$ のシートに14人が座っている図から、 $1\text{m}^2$ あたりの人数を求める $14 \div 8$ の式を答える問題で、「 $8 \div 14$ 」と誤答したケースが多くありました。
- ・ バスの乗車が定員より20%多い60人になっている設定で、定員をもとにしたときの乗っている人数の割合を、百分率を使った図に表したものを見て、定員が100%、乗車率が120%と、それぞれの割合を選択肢から選ぶ問題で、さまざまな誤答例がありました。

これらの他には、全国平均を超えて正答率100%だった問題もあり、全体的にみると、基礎的、基本的な内容の理解と定着は、今年度も一定の成果が出ているとは思いますが、「単位量あたりの大きさ」や「割合」に関するものは、今年も課題となりました。2つのものを、どちらかを基準にして比べることは、算数がそう苦手ではない児童でも、理解や定着に時間がかかったり、理解に混乱があったりして、難しいように感じます。いずれも5年の学習内容ですが、府教育庁(府教委)が作成している単元確認プリントや力だめしプリントを復習で活用する際、例年以上に割合について重点的に扱うとともに、6年生については、結果の返却・解説時やそれ以降も復習をいたします。

## 算数科の調査より(続き)

### ◆B 調査(主として活用)について

平均正答率は全国平均をわずかに下回っています(全13設問中、4問は上回っていました)。

活用力について特に課題を感じた問題とその内容、考察は、次の通りです。

- ①40mハードル走の目標タイムを求める式の例として挙げられた、「40m走のタイム+ $\boxed{0.4}$ 秒×ハードルの数=目標タイム」の式の、0.4のところを0.3に変えたりする話をもとに、「0.4秒」がどのような時間を表している数か、言葉や数を使って説明する問題。
- ②A小学校とB小学校の4、5、6、7月の図書の貸出冊数が分かる表と、A小学校の本の種類ごとの貸出冊数が分かる表が示されているが、その2つの表からは判断できないことはどれか、4つの選択肢の中から「5月は伝記の貸出冊数が少ない」を、正しく選ぶ問題。
- ③A小学校とB小学校それぞれ、4～7月の月ごとの「物語」の貸出冊数の変化を整理した折れ線グラフを比べた説明が正しくない理由を、説明する問題。
- ④三角定規2枚をつなげて作った三角形を3つ敷き詰めると正三角形ができることを、「 $360 \div 120$ 」の計算で表した式が、何を計算したものなのか、式の360と120はそれぞれ何を表しているのか説明する問題。
- ⑤三角定規2枚をつなげて作った四角形を6つ並べてできる形を、4つの選択肢から選ぶ問題。

①④⑤は(①④は全国の平均正答率も非常に低い問題ですが)、特に低い正答率でした。

①④は、正しい式がなぜ正しいのか、何を表した式なのかを理解して、言葉で説明できる力が求められます。これについては、ふだんの授業からもっと意識して「式の説明」ができる場面を多く取り入れるようにするしかありませんので、授業の改善に努めます。

②③は、表やグラフを正しく読み取る力が重要となる問題ですが、とりわけ③については慎重な判断が求められます。2つの折れ線グラフは冊数の目盛りに違いがあり、100冊単位の日盛りの幅が広い折れ線グラフの方が、変化の傾きが急な線になります。グラフの見た目の傾きに惑わされず、目盛りから何冊増減したのかを計算するところがポイントです。正しい根拠を見つける習慣を身に付けられるようにせねばなりません。授業では、正解を追究する方に、教師も児童も意識が向きがちな面もありますので、この③のような、誤答から学ぶ機会をもっと必要だと考えます。

⑤は、「三角定規2枚をつなげて作った四角形」のどの角を一つの点に集めて並べるのかを、正しく読み取った上で、完成図をイメージする必要があります。読解力と見通しをもつ力をつけることが課題です。

B調査は、数学的な考え方を問われる記述式の問題が多く出題されます。平均正答率も含め課題点はまだまだありますが、今年度も割とよくできている問題はあり、活用力の育成については、改善の傾向が出ているかのではないかと推察しています。次年度以降も、中・長期的な経年変化を見て判断して参ります。昨年度も考察に入れましたが、見える情報(問題文・図・グラフ・資料等)から判断することについては、文章読解力に加え、時間・空間の認知力も必要となります。また、考える場面での設定・条件が複合的なものについては、「まずは～、そして～」のように順序立てたり、「～ということは、つまり」のように、自分の言葉で置き換えたりして整理することも重要です。ふだんの生活・学習でも、そのような思考活動を体験する機会を、学校として意識してより多く作っていく必要があると考えています。また、授業の中では、「正しい着眼点をもって分析する」、「説明(証明)に必要な条件を満たしているか判断できる」、状況や設定に応じて、「根拠となることからを過不足なく説明する」ことができるようになる、考える・書く・話す学習活動を、これからも大切にして参ります。

---

## 学習状況アンケート調査より

---

児童質問紙によるアンケート調査から見てきた傾向などを考察しました。「学校に行くのは楽しいと思いますか」、「学級みんなで協力して何かをやり遂げ、うれしかったことがありますか」、「学校のきまりを守っていますか」、「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか」、「人の役に立つ人間になりたいと思いますか」、「総合的な学習の時間は好きですか 学習したことは普段の生活や社会に出たときに役に立つと思いますか」、「5年生までに受けた授業で扱うノートには、学習の目標(めあて・ねらい)が示されていたと思いますか」、「国語や算数の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか」、「算数の授業で問題の解き方や考え方が分かるようにノートに書いていますか」など、85設問中多くの設問で、肯定的回答が100%になっていましたし、ほぼ全てについて、肯定的回答が全国平均と比べても多い結果でした。

家庭生活にかかわることで、以前は全国平均より少なかった、「朝食を毎日必ず食べる」という児童の割合が多くなりました。昨年度、本校独自のアンケートでも改善が伺えましたが、引き続きよい流れとなっています。各ご家庭でのご配慮に感謝申し上げます。昨年度に続き気になる傾向は、テレビ、ビデオを見る時間で「4時間以上」と回答した児童が、全国平均より多いことです。ゲームについては、長時間接する児童は多くありません。ご家庭での生活パターンには、それぞれご事情もあると思いますが、この結果をご留意いただければと思います。

児童の個々の回答の中には、否定的なものも見られます。学校側は、個々の回答結果を把握できますので、気になる項目の回答結果については、4月以降の変化も見ながら必要に応じ、児童のとの関わり、学校全体での指導、家庭や地域との連携にそれらの情報を生かして参ります。

---

## まとめ

---

小規模校で調査母体数が少なく率数値の変動も大きいため、マクロ的な分析の有効性は慎重に判断すべきですが、一人ひとりの結果に注目し、少人数授業の良さを生かした一人ひとりに応じた対応を今後進めて参ります。休み時間や放課後等の個別の学力保障は、可能な範囲ではありますが継続いたします。

本校では国語科を中心にした授業づくりの研修を進めて3年目に入りました。児童が学習の目的やゴールを明確に意識し、何時間かの学習のまとめ(単元)を通して、読む・書く、話す・聞く(話し合う)活動に取り組めるよう、授業改善をねらいとして取り組んできました。児童質問紙の、学習の進め方や内容についての設問に肯定的な回答が多いことは、成果の一つの表れとして手応えを感じております。また、算数科ではここ数年間、教育委員会による人的配置が保障され、今年度も、T. T. (2 人体制のティームティーチング)にしたり、習熟度別に学級を分割してコース選択ができる形にしたりして、授業を進めております。これら指導体制の工夫だけでなく、児童が主体的に、根拠をもった考えを説明できるような学習の進め方について、より工夫して参ります。

なお、本校には独自の通級指導教室はありませんが、通級指導を週あたり 2 日行えるよう赤阪小職員による兼務体制が村の支援により整えられております。人的配置は行政の動きによって左右されるところもありますが、今後も可能な範囲で、一人ひとりの習熟・定着度合いに適したきめ細やかな学習指導を行えるよう、職員一丸となって進めて参ります。

基本的な生活習慣の定着と学力向上との間には相関関係があるということが、これまでの調査から明らかになっております。本校の「児童質問紙」の集計結果は概ね良好でしたので、本紙をご参考にしていただき、お子様の自立・よりよい成長、学力向上に向けての家庭環境づくりと、基本的な生活習慣の定着に、一層のご配慮をお願い申し上げます。